

聖書箇所：ゼカリヤ書9章9～17節

説教題：あなたの王が来られる

## 1 ヤコブからゼカリヤへ

先週は創世記を開き、ヤコブが語ったことばを見て参りました。ヤコブは、息子のひとりであるユダの子孫として登場してくるふたりの人物について語ります。ひとは、ヤコブの時代から下ることおよそ千年、イスラエルの王となったダビデ。そしてもうひとは、ダビデの時代からさらにまた千年下って登場したイエス・キリストです。

彼はこんなことばで救い主キリストが来られることを預言しました。「彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、良いぶどうの木につなぐ。彼はその着物を、ぶどう酒で洗い、その頃をもをぶどうの血で洗う。」

今朝はゼカリヤ書を開いております。ゼカリヤという預言者の手によって紀元前およそ500年頃に書かれたものと言われております。ダビデはイスラエルの王となってから500年ほど下った時代です。ヤコブの語ったことばの半分について、つまりイスラエルにはすぐれた王が現れるということについては、そのとおりに実現したことをゼカリヤは知っています。しかし、ヤコブのことばの後半部分、救い主キリストはまだ来ていない。そんな時代にゼカリヤは預言者として活躍しました。

9節で彼はこう語っています。「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、

柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」

## 2 ゼカリヤの時代

ゼカリヤが預言者として活躍していた頃のイスラエルはどんな時代だったのでしょうか。イスラエルは当時大きな力を持っていたバビロニアに攻め滅ぼされ、補囚となって海外に強制移住させられました。後にペルシャ帝国が代わって権力の座についたとき、やっとイスラエルの人々は自分の国に戻ることに許されます。しかし、故国に帰ってきてみたものの、国は荒れ果て、ソロモンが建てた神殿は壊され、がれきの山となっていました。この先どうやって暮らしていけばよいのか、この先に希望が見えない。その日その日を生きていくだけで精一杯。先のことなど考えられない。国も荒れ果て、人々の心も荒れ果てているような、そんな時代でした。

9節の最初はこうです。「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。」あなたがたのところに王が来られる。その王は、あなた方を救う方なのだから。だから喜びなさい。

希望もなく暗い気持ちになっている人たちを奮い立たせるために、このようなことを語ったようにも見えます。でも不思議に思うことがいくつかあります。

皆さんは「喜びなさい」と言われて、喜ぶことができますか。そもそも喜ぶという行為は人から命令されてするものではない。自分

の心の深いところから自然にわき出てくる感情です。ですから、「喜べ」と言われても戸惑ってしまいます。

それからもうひとつわからないことがある。確かに王は来られるかもしれない。確かに救い主が来てくださるのかもしれない。でも、それはいつであるのか。あした来る。数年以内に来る。それなら喜べるかもしれません。しかし、ゼカリヤの時代、そのかたがいつ来られるのかは誰も知りませんでした。いつ来るかわからないのに、「喜べ」と言われても、あまり嬉しくはありません。それが正直なところです。

無理矢理にでも、とにかく信じて疑わずに「喜べ」というのでしょうか。もしそうであるなら、私はついていくことはできません。勘弁して欲しいと思います。もちろん、聖書がそんなことを言うはずはありません。では、なぜ「シオンの娘よ。大いに喜べ」と言われているのか。そのことを考えて参ります。

### 3 ろばに乗られる王

ヤコブはかつてこう語りました。「彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、良いぶどうの木につなぐ。」

ヤコブが語ってから1500年の後にゼカリヤはこう語ります。「柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」

使われている言葉は違いますが、1500年経っても、内容はほとんど変わらない。これだけでも驚くことですが、ただ内容は同じだと言うのなら、何の価値もありません。

ヤコブとゼカリヤが語ったことがどうして価値があるのか。このことがやがてイエス・キリストによって実現したからです。マタイの福音書21章7～11節をお読みします。

「そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切ってきて、道に敷いた。そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞって騒ぎ立ち、「この方は、どういう方なのか」と言った。群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」と言った。」

ろばの子に乗ってエルサレムに入られるイエスを、群衆は興奮しながら迎えました。都中が大騒ぎです。なぜ、人々はこのように熱狂してイエスを迎えたのか。二つの理由があります。

人々は、子どもの時から何度も聞かされていたのです。今朝開いているゼカリヤ書のことばです。「あなたがたの王はろばの子に乗ってやって来る。」そのことばを聞きながら、イスラエルを救うために力ある王様を神は送ってくださるに違いないと待ち望んでいたのです。それがいま目の前で、現実いろばの子に乗ってエルサレムの町の中に入ろうとされる方がいる。ヤコブが語り、ゼカリヤが語ったとおりの光景が目の前に展開している。ろばの子に乗っておられる。人々が熱狂してイエスを迎えた一つ目の理由です。

### 4 ダビデの子

しかし、それだけでは実は確かな証拠になりません。ろばの子に乗ってエルサレムに入る者は沢山いたでしょうから、ろばの子に

乗っただけでは、イエスが、あの待ち望んでいたやがて来られる王なのかどうか決定打にはなりません。もう一つの理由が必要です。

人々が「ダビデの子にホサナ」と叫び、ことさらに「ダビデの子」にこだわっております。ヤコブは、ユダ族からはイスラエルの王が出るのだと預言しました。そのことばとおりにユダ族出身のダビデがイスラエルの王となりました。ヤコブは、その同じユダ族から救い主が現れるとも語りました。ですから、救い主はダビデの直接の子孫でなければなりません。

やがて来られる王は、ユダの子孫であり、ダビデの子孫でもある方。そしてその方はろばの子に乗って私たちのところに來られる。

ある方は、それだけではまだ証拠は足りないと言うかもしれません。ダビデの子孫は沢山いただろう。ろばの子に乗るなんて誰でもできると言うかもしれません。

でも、人々の耳にはすでにイエスの噂は聞こえていたのです。この方は、町は村を巡り、病をいやし、力あるわざを行い、権威ある者のように真理をお語りになる。もしかして、神は預言者を遣わしてくださったのだろうか。もしかして長年待ち望んできた王様を送ってくださったのだろうか。でも自信がない。はっきりわからない。決めかねていました。人々は迷っていました。

そこへイエスがろばの子に乗ってやってきた。これが決定打となりました。この方こそ、長く待ち望んでいた救い主、私たちの王であると熱狂して人々はイエスを迎えました。

## 5 柔和な王

人々は喜びました。喜び叫びました。ゼカ

リヤが預言したとおりのことが起きたかに見えました。しかし、ろばの子に乗られたイエスはその後どうなったのでしょうか。イスラエルの王になられましたか？いいえ。十字架で処刑され、殺されました。誰が殺したのですか？ろばの子に乗られたイエスを喜んで迎えた人たちです。それがまるで手のひらを返すようにして、イエスを憎むように心変わりし、怒りをぶつけ「十字架につけろ」と叫んでいったのです。

ヤコブの時代から数えれば2000年待って、やっと來られたと思った救い主。しかし人々は、この方を十字架に追いやってしまいます。王として來られた方は、あつけなく死んでしまいます。ゼカリヤが「シオンの娘よ。大いに喜べ」と語ったはずなのに、悲惨な結末で終わりました。

いったいなぜゼカリヤは「大いに喜べ」「喜び叫べ」と語ったのでしょうか。ゼカリヤはこう語っています。「この方は、柔和で、ろばに乗られる。」この「柔和で」は、新改訳聖書の欄外に別訳で「へりくだり」とも訳せると記しています。

イエスのへりくだりはどのようなものだったのでしょうか。今日は一つのことだけを語ります。

ポンテオピラトは、イエスに罪はないと認めていました。罪がないのに、罪ある者として十字架で殺される。こんな理不尽な話しはありません。「わたしは無罪だ。なにも悪いことはしていない」と叫んで訴えるのが普通でしょう。あるいはこう言うかもしれない。「神の子であるわたしに対して、お前たちがいいま何をしているのか、わかっているのですか。わたしは、忍耐して、我慢して、お前たちの罪を背負い、死んでいくということを、

よくわきまえなさい。」

自分が死ぬことの意味を誰にも理解されず、いや、むしろさげすまれ、馬鹿にされ、ののしられ、怒りをぶつけられながら死ぬなどということは、呪われた死に方です。自分がすべて否定されたかのような死に方です。十字架で死ぬことが避けられないというのなら、せめて自分がしていることを訴え、相手に知ってもらいたい。それが私たちのせめてもの思いです。死ぬにしても、意味のある死に方をしたいと願っているからです。

イエスはどうかされましたか。十字架で自己弁護することはありませんでした。ご自分が神の子であることさえ明らかにしようとはしません。ひとことも私たちを恨むようなこと、呪うことをせず、かえって、私たちのために祈られながら死んで行かれました。

これがイエス・キリストのへりくだりです。人間の目から見れば、愚かて世界一運の悪い男の死に方です。しかし、主はこのような方法で私たちを救おうとされました。愚かに見える十字架に、実は最も大きな恵みがあったのです。

なぜゼカリヤは「シオンの娘よ。大いに喜べ」と言ったのでしょうか。あなたがたは、いま希望が見えないかもしれない。いまはもしかして死を待つばかり、そんな病の床に伏せている状態かもしれない。この地上では失敗者になったかもしれない。こんな自分は救われないと、悲しんでいるかもしれない。私たちの目には、すべてが取り返しがつかず、取り戻すことはできない。遅すぎるとしか見えない。

けれども、ゼカリヤは言う。「シオンの娘よ。大いに喜べ。」神にとって、遅すぎるとことは一つもないと言っているのです。神に

とってすべては、ちょうど良いすばらしいタイミングで進んでいるのです。神の救いとはそのようなことなのだ教えているのです。

取り返しのつかないと思っていた、過去のあのことのこと。すべてを主は取り戻してください。主はすべてを最も良い状態に回復してください。いまはそう見えないかもしれない。でも、主は必ずそうしてください。

命令で言っているのではありません。「あなたがたは、いま喜ぶことができる。だからいっしょに喜ぼうではないか。」主がともに喜ぼうとされています。あるかないかの救いを待っているのではありません。必ずその方は来られる。それはもう決まっていること。だから、いまこの時、喜ぶことができる。そのような意味で言われています。

このクリスマス、やがて来られる主を待ち望みつつ、主が与えてくださる喜びを味わいたいと願います。